



ホール全景



建物全景



集会所全景

直島ホール

選評

直島は、アートと建築のメッカのひとつとしていまや改めて説明も不要なほど著名となった瀬戸内海に浮かぶ小島である。しかし、交通の便などの物理的制約と地域・行政の抑制の効いた開発姿勢により、自然環境と島の小さなコミュニティが健全に保持されながら遠来の客人と共存している幸福な島でもある。その本村地区に旧公民館の老朽化に伴って事業化されたのが本建築であり、まさに地域に住まう人びとのスポーツ・文化活動から冠婚葬祭まで日々のさまざまな活動の拠点となる施設である。

設計の発想の原点は、土地に吹く風に代表される地下水・太陽光などの自然エネルギーの建築への取り込みであり、木や土などの天然素材を活かすことであり、その姿勢は非常に明快である。敷地のある本村地区には、中世の時代から風の通り抜けを活かした伝統的な民家の暮らしがあり、そのプラ

ン分析や地域を吹く風の検証のもとに、ホールの自然通風のシステムがテクノロジカルなジェスチャーを一切見せない手法で設計されている。おおらかにひろがる無垢・無塗装のヒノキ葺きの大屋根のトップに若干大きめの入母屋を構成し、そこを南から北へ卓越風が吹き抜ける力を、ホール内の空気の誘因力を利用して、快適な通風を実現している。また床下のクールピットを併用することで年間を通してやさしい温度の外気を導入している。ホール棟と対をなす集会所棟は、同じヒノキ素材の大屋根がこちらでは日射遮蔽・雨除けルーバーとなっており、下部にハウス／イン／ハウスのかたちで配置された集会諸室に快適性を保つ傘として機能しており、環境に対してホール棟とは別の建築的な答えを提示している。

ホール棟の内部に入ると、もうひとつの驚きが用意されている。外観からは想像しがたいが内部には小屋組が存在しない。屋根構造は面的な構成部材により形成され、内部に高さ方向のフリーな膨らみ



BCS賞は、建築の事業企画・計画・設計・施工、環境とともに、供用開始後1年以上にわたる建築物の運用・維持管理等を含めた総合評価に基づいて選考し、建築主・設計者・施工者の三者を表彰する建築賞です。この賞は、1960年にはじまり2017年で58回を数えます。

< 2017年 第58回 BCS賞受賞作品 > 静岡県草薙総合運動場体育館(このはなアリーナ) 新宿東宝ビル 太子町新庁舎「太子の環」人がつどう・まちをめぐる・太子がつながる 竹中大工道具館新館 敦賀駅交流施設「オルパーク」駅前広場キャノピー TSURUMIこどもホスピス 東京駅八重洲口開発: グランルーフ、グラントウキョウノースタワー、グラントウキョウサウスタワー、駅前広場 TOTOミュージアム 桐朋学園大学調布キャンパス1号館 としまエコミュニセタウン TOYAMAキラリ 虎ノ門ヒルズ(環状第二号線新橋・虎ノ門地区第二種市街地再開発事業Ⅲ街区) 直島ホール MIZKAN MUSEUM YKK80ビル [特別賞]日本橋ダイヤビルディング [江戸橋倉庫ビル]の保存・再生 早稲田大学 早稲田キャンパス3号館

建築主

直島町の新たな地域の拠点施設として より 町を活性化する

直島ホールは、役場の南側に元々あった体育館と集会所の老朽化に伴い建て替えた公共施設です。町のコンセプトである「環境とアートの町」に相応しい建物にしたいと、環境設計を得意としている三分一氏に設計を依頼しました。こうして太陽、風、地下水などの自然エネルギーが活用され、かつ、古くからのまち並みに溶け込む和風デザインが特徴の素晴らしい建築が出来上がりました。

2015年12月から供用を開始して3年近くになります。町民の皆さまには集会、レクリエーションなどに使っていただくとともに、女性だけの人形浄瑠璃「直島女文楽」の活動の拠点として活用されており、この町に無くてはならない集いの場となっています。

この度の受賞を契機に、これまで以上にこの施設を有効活用しながら、町の宝として末永く残していきたいと決意を新たにしております。

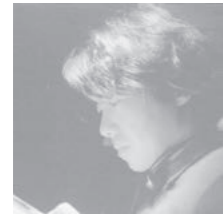


直島町長
小林眞一
Shinichi Kobayashi

設計者

より

建築は地球のディテールとなり、 やがて未来への手紙となる



三分一博志建築設計事務所
代表
三分一博志
Hiroshi Sambuichi

直島での2年半にわたるリサーチによって、地形や自然に寄り添う集落の姿形から先人の知恵が徐々に読めてきました。

中世より直島の本村は瀬戸内の島では類を見ない城下町として地形に沿った扇形の碁盤目状に区画され発展していきました。ただ、都などの権威的な町割とは少し異なり、人と地球の知的な関係による集落の形であることが分かってきました。

地形、棚田、街路、堀、門、庭、建物の配置

からプランまで全てにおいて風・水・太陽といった「動く素材」が緻密に区画整理され、かつ集落全体で統一されており、本村そのものが地球のディテールとなっていました。それは、集落の形が「動く素材」の文字として、表れてくるものでした。

400年前から伝えられてきた先人の風・水・太陽のメッセージを、私は受け取りました。そのメッセージを直島ホールという姿形で未来へ伝えたいと考えました。

施工者

より 動く素材と自然材料を生かして 地域活動の拠点を創る

直島町民の地域活動の拠点となる施設は、動く素材「風・水・太陽」を建物の機能に取り込み、自然材料を積極的に用いた設計となっています。難易度の高い建築作品を完成させるため、仕上げ材料には瀬戸内を中心に国内のものを厳選し、造作のヒノキ材は腕利きの大工による加工組立、漆喰大天井は卓越した技術のある左官にて仕上げていきました。土壁や土間タタキ、石、もみじ、桜、その他数多い自然パーツがあり、気を

許さない施工となりましたが、「環境とアートの町」の代表建築に携われたことは施工者一同の誇りとなっています。

こだわりのある建物を工期内に納めるには大変苦勞もありましたが、建築主・設計者・施工者が一丸となれたこと、大変多くの方に支援をいただいたことにより無事完成～運用に至ることができました。関係されたすべての方に感謝し御礼を申し上げます。



鹿島建設株式会社
中国支店
工事事務所 所長
足羽敬三
Keizou Ashiwa



ホール内部、舞台

を付与している大屋根の内側表面は、真っ白な漆喰でシームレスに（寄棟の稜線さえ一切ない曲面で）塗り込められて、担当された左官職人の技量の高さを誇っている。伝統的な藁葺家に近い勾配をもった大屋根の二棟が、つくり出す景観は、懐かしい村のお堂のような風情で周辺の本村地区の景色に溶け込んでいく。不思議なことだが、あまり余白を持たない（建蔽率の高い）敷地と建物のバランスも、周辺環境のコンテクストの中ではなじんでいるように思われる。

無垢・無塗装のヒノキ板を屋根を覆う材料に選択することについては、建築の耐久性の観点でいえば議論の余地は残るかも知れないが、止水性能は内側の層によって担保されており、伝統的な日本建築がそうであったように建築主の理解のもとで定期的に葺替える営みを前提とすれば、この素材選択はまさにこの環境のもとでつくり出される建築の外皮として見事な解答と考える。

【選考委員】
木下庸子・堀場弘・山本平生



集会所内部（大屋根見上げ）

計画概要

建築主：直島町

設計者：三分一博志建築設計事務所

施工者：鹿島建設(株)

所在地：香川県香川郡直島町696-1
竣工日：2015年11月13日

敷地面積：3,096㎡
建築面積：1,269㎡
延床面積：1,272㎡

階数：地上1階
構造：鉄骨造（一部鉄筋コンクリート造、木造）